

知ってますか
技術の

あれ
これ

9

工学の源流を探る(2)

箱館諸術調所と五稜郭



三浦 基弘

MIURA Motohiro

大東文化大学講師

星形の城、五稜郭陵

函館は北海道の玄関口。地名の由来は室町時代に津軽の豪族河野政道が宇須岸^{うすけし}という漁村に館を築き、この館の形が遠方から眺めると、箱に似ているところから「箱館」と呼ばれるようになったという。「函館」になったのは明治2年からといわれている。

函館山、東京タワーより1m高い334mから市内を見下ろすと、扇を半開きしたような町が広がっている。その扇の中央、両側の海岸線からほぼ中央の位置に、ひときわ高い五稜郭タワーが見える。その手前に特別史跡五稜郭(写真-1)がある。正式名は亀田御役所土塁。また当時このあたりは、ネコヤナギが群生する湿地で人が近寄りたが場所であった。この土地を柳野^{やなぎの}といっていた。そのため柳野城ともいう。外国船の監視と外国人からの目隠しを第一の目的でこの場所が



写真-1 五稜郭(2008年3月撮影)(函館市教育委員会 所蔵)
堀が結氷して、五稜郭の形がはっきりとわかる。

選ばれた。

鎖国を続けてきた徳川幕府は、1854(安政元)年米国のペリーの強硬な態度に押切られて下田、箱館を開港した。それ以前からロシアの南下政策が露骨となり、蝦夷地周辺がにわかに陰悪になってきた。幕府は松前藩だけの防衛では不安になり、箱館附近を幕府直轄地とし、幕府直属の箱館奉行を任命し、ロシアなどの対外交渉に当たさせた。箱館奉行は情勢からいつ外国が武力を行使するかという不安から箱館附近の警備は焦眉の急であった。当時の箱館奉行所は港に近く、傾斜地でしかも障害物がなく、まる見えのため敵艦の砲撃に堪え難いと考え、亀田柳野^{かめだやなぎの}に堅固な城を築き、そこに移転すべきであると献策した。

幕府はその策に従い、柳野に城を築くことを決定。1857(安政4)年7月に着工し、予算18万両余の金を使った。工事請負は河津三郎太郎、設計監理は諸術調所^{しよじゆつ}(図-4)教授武田斐三郎^{たけだ あやさぶろう}(写真-2)、土木工事は松川弁之助、石工事は井上喜三郎、木工事は中川源蔵が担当。御用大工の人数は毎日、500人。土石工事に動員された人夫は、最も多いときで6,000人にのぼったという。使用する石材は箱館山の安山岩を切り出した。隅角や「はね出し」など重要な部分は、備前産(現在の岡山県)の花崗岩を使った。最初は石の刻み方は丁寧であったが、後には資金が不足して赤川、亀田川などの川原の石で代用した。今でも裏門のあたりの石垣が粗末なのはそのためである。7年後の1864(元治元)年4月に作り上げたのが、五稜郭である。

箱館奉行が函館山の麓の旧役所から五稜郭に移り、